平成18年3月5日発行（年4回 3・6・9・12月5日発行） 通巻77号

特定非営利活動法人
CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

子どもたちの明日
Children, Our Future

2006年3月 NO.77

サムロンクロム地区のチェンメン保育所 © 小林正典

目　次

② サムロンクロム 内戦直後から13年間の歩み
⑤「カンボジア織物テキスト」完成
⑥ 100人の社員の心をつかんだ活動紹介
⑧ カンボジア文化発見 ～葬式～
CYRは「認定NPO法人」になりました

祝 CYRは、「認定NPO法人」として認定されました （詳しくは裏面をご参照ください）

幼い難民を考える会（CYR）は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

サムロンクロム　内戦直後から13年間の歩み
～現地NGOとの連携についての学び～

前号では、テッカポンヨ公立幼稚園に活動を引継いで閉鎖した、サムロンクロム地区のトロピエンタヌンとチェンメン両保育所についてお伝えしました。今回は、このサムロンクロム地区で手探りで活動を始めた時代から、公立幼稚園にバトンタッチするまでの13年間の活動を振り返ってみましょう。

難民キャンプから、カンボジア国内へ

難民キャンプが閉じた1993年前後、CYRは難民が帰還するカンボジア国内で厳しい状況にある子どもたちの支援をはじめました。当時のスタッフの努力でまず事務所をプノンペン市内に設け、1991年12月12日、カンボジア政府との契約式で合意書にサイン、これでCYRのカンボジアの活動が正式にスタートしました。

当時、カンボジアの地方で活動するには多くの問題がありました。ポルポト派の武装勢力が各地に出没していたことによる治安の悪さ、埋められたままの多くの地雷、道路事情などの問題です。

初めの活動地としてCYRが決めたのは、帰還難民センターがあったプノンペン市郊外のダンカオ郡サムロンクロム地区です。この地域は「子どもたちの生活環境が厳しい」「保健・衛生状態が悪い」「女性が世帯主で、子どもが大勢いる家庭が多い」「地方からの流入者が多い」など、支援活動を必要としている状況が目立っていました。

まず取り組んだのは家庭環境の調査

CYRは、地域の生活事情を知るために、現地の女性調査員の育成を開始。簡単な保健・衛生・栄養・育児等の研修を行いました。彼女たちとともに村の各家庭を巡回して、地域の生活実態を調査しました。そこでは主に以下のような厳しい事情が見えてきました。

- 衛生状態の立ち遅れ（水を煮沸せずに飲むなど）
- 灌漑設備の不足による水／農作物の不足
- 母子家庭/兵役や出稼ぎで夫が不在の家庭が多い
- 子どもの栄養不足

内戦で多くの成人男性の働き手を失った農村家庭では、母親が代わりに働き、その間幼児は放置されるか、年端もいかない兄弟の世話に委ねられていました。

生活の実態調査を行った家庭調査員

トロピエンタヌン保育所（1992）、チェンメン保育所（1993）開設

各家庭の巡回訪問で、農繁期に子どもたちの世話を望む母親が多いことが分かったので、地区で最も貧しかったトロピエンタヌン村に保育所を開き、幼児35人の保育を始めました。

村の集会所に屋根を追加して、室内を広く改造して保育所とし、保育時間は朝6時半から午後3時半まで、朝・昼の給食を提供し、女性調査員が保育者となり、母親とチームを組んで交代で保育にあたりました。まもなく希望者が多いため受け入れ幼児の数を50人に増やしました。

トロピエンタヌン保育所に続いて、隣村から保育所を開いてほしいと強く望まれ、チェンメン保育所が翌年の1993年11月にオープンしました。保育所は村有地に建てられ、保育者4人で幼児50人を半日保育する体制でスタートしました。

当初の保育所

保育所を開いた頃の写真

子どもたちの命を守りたい　© 小林正典

給食をつくる母親たち　© 小林正典

栄養不良の
子どもを保護
© 小林正典

© 小林正典

© 小林正典

現地パートナーの撤退で、CYRの直接運営に

カンボジアでは、現地で活動をしている団体と共同プロジェクトを組むことを、政府から要請されていました。CYRが選んだのは、現地NGO「CWDA」(カンボジア女性開発協会)という団体です。CWDAは、女性の権利、能力向上、社会への貢献を高めるために、健康、識字教育、職業訓練、HIV/AIDSなどの活動を行っている団体でした。しかし、1999年にはCWDAが活動資金や人材の不足などによって撤退。地域の保護者とも相談した結果、その後はCYRが直接運営することになりました。

近年、プノンペン市郊外の同地区は急速に都市化しました。この流れの中でCYRは2003年夏から教育省へ働きかけ、公立幼稚園開設の折衝を重ねてきました。市・郡や村人、特に子どもたちの保護者への説明に配慮しました。昨年9月にトロピエンタヌンとチェンメン両保育所を閉鎖し、10月19日、テッカポンヨ公立幼稚園の開園式を終え、移行の時を迎えて現在に至ります。

連携から学んだこと

サムロンクロム地区の本事業はCYRが初めてカンボジアのNGOと協力したプロジェクトでした。人々のニーズに詳しい現地NGOをパートナーに事業を展開することは、効果的な支援方法のひとつです。

お互いの活動理念やプロジェクトの実施方法を団体間で共有することは、とても重要な意味があり、また難しい点でもありました。

現地NGOの保育所の自主運営のために、CYRはどのような支援をしたら良いのか、深く考える経験となりました。お互いの役割の明確化、年度ごとの目標設定、共同評価のあり方など、連携して事業を行う上でCYRは多くの事を学びました。この経験から学んだことは、現在行っているケマラとの協力事業に活かしていきたいと考えています。

CYRは、サムロンクロム地区の2つの保育所を閉じる際に、保育者6人、地区長、村長等計9人、保護者42家族を対象に、アンケートを実施しました。地域の人々の声をアンケートからご紹介します。

保育者

- 保育者研修では、子どもたちの教育や世話について、さらによく分かるようになりました。
- 園児の家庭訪問では、子どもたちが保育所で多くを学んでいると両親から感謝されて、幸せな気持ちになりました。
- 地域との関係が難しかったです(多数)
- 子どもたちをとても愛していますので機会があればまた保育者として働きたいです。

保護者

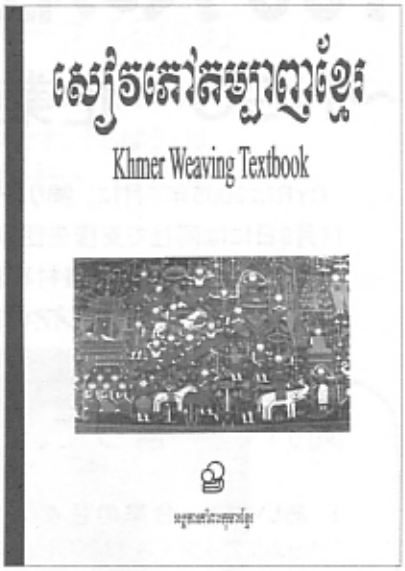
- 子どもが水で溺れたり、バイクにひかれたり、木から落ちたりするような事故について、心配しなくて済みました。
- 歌ったり踊ったり絵を描けるようになり、文字と数字も覚えてよかったです。
- 清潔にするように学び、健康に育ったのがうれしいです。
- 道徳や礼儀正しさを身につけて、精神的に大きく成長しました。

地区長

- CYRの保育所のおかげで、村の親たちは心配せずに仕事ができるようになりました。
- 保育所に通っていない子どもに比べて、CYRの保育所に通っている子どもは精神的、身体的に成長していますので、全ての子どもたちに保育所へ通うよう励ましました。
- 新しいテッカポンヨ公立幼稚園に、より多くの子どもたちが通えることを願っています。

「カンボジア織物テキスト」完成

～伝統技術を残す～



織物テキスト表紙（カラー印刷）

形ある資料の必要性

カンボジアは伝統的な美しい絹織物で知られ、特に「絣（かすり）」織り」は有名です。カンボジアの絹絣の歴史は古く、約300年前までにさかのぼると推定されています。

カンボジアでは昔から織物技術は口承され、記録がほとんど残されていません。高度な技術を持っている人たちが高齢化しているため、その継承と復興が必要とされています。親のそばで「身近に見ながら覚える」ことの繰り返しだったので、地域差も生じて技術面でも不確かな点が多くなっています。

伝統を保存し、CYRの織物研修センターでわかりやすく伝えていくためにも、カンボジアの誇る絹織物の技術を形ある資料にまとめて残すことは、CYRの課題でした。こうした必要性から、CYRでは昨年12月「カンボジア織物テキスト」を作成しました。

イラストや写真を多用

テキストには、織機の部品や織物の工程が解説されています。伝統的な草木染めは、カラーの写真入りで説明されています。グラムやリットルなどの単位で表現するほかに、一部は「この袋2つ」「このビンに一杯」と併記して、村の人々にとって分かりやすいよう工夫がされています。

写真で織りの工程を解説

織物テキストを使う研修生

スーン・ミット

テキスト作成の中心となったCYRの織物研修センターのトレーナー、スーン・ミットさんはこう語っています。「自分の頭にあることを、分かりやすく順序だてて表現することに一番苦労しました。テキストの一部を研修の修了生や村のワークショップで使い、表現が充分に理解されるか、チェックをくりかえしました。このテキストが、いろいろな人々に役立つことを願っています。」

CYRの織物事業　CYRでは農村で暮らす女性の経済的自立と、カンボジア織物の伝統保存を目的とした織物事業を行っています。女性たちは研修センターで染織技術を学び、織り上げた製品を地域の仲買人を通じて販売し、現金収入を得ます。一部は日本で販売して収益を織物事業に還元しています。

テキストを使ってみて

このテキストを使った織物研修センターの研修生や修了生からは「写真がたくさんあって、見てわかりやすい」との声が聞かれました。中には、「絣柄の見本をテキストに載せてもらえたら、それを見て模様を括れるので、もっとありがたい」との要望もありました

今後、テキストは研修センター研修生や修了生のフォローアップ、村でのワークショップ研修で配布して使います。CYRの織物事業の目標、「カンボジアの伝統織物技術の保全」と「農村女性の現金収入の向上」にこのテキストが役立つことを期待して、これからも内容を見直していきます。

このカンボジア織物テキストの制作には、財団法人日本国際協力システムのご支援をいただきました。

100人の社員の心をつかんだ活動紹介

～NGO・企業・大学が力を合わせて社会貢献～

CYRは2005年7月に、㈱リコーの社会貢献クラブ・Freewillから織物事業に20万円のご寄付をいただきました。11月9日には同社で支援先団体の報告講演会が催され、約100名のリコー及びグループ各社社員が出席しました。この講演会では、CYR峯村事務局長とともに、東京外国語大学の学生グループ「るぱう（カンボジア語で「かぼちゃ」の意味）」がカンボジアの文化を紹介しました。

聞いて、 言って、 見て、 書いて知るカンボジア

1. あいさつ：合掌の色々
「チョムリアップ・スオ(こんにちは)」が会場に響きます。合掌をするときの手の高さは、挨拶の相手の立場で変わります。

2. クロマー七変化
クロマー(カンボジアの万能布)の巻き方の色々を紹介。両脇を結んで首にかけ、くぼみを作って果物や小銭を入れます。頭の上に荷物を載せたり、赤ちゃんを抱くのにも使えます。

3. チョーン・クバン（伝統衣装）着付け紹介
～一枚の布を着る～
大きな一枚の布が舞台の上でくるくると巻かれ、脚の間をくぐり、背中で止められました。カンボジアの伝統衣装の紹介に会場は感心した様子で見入っていました。

4. 自分の名前をカンボジア語で書きました
カンボジア文字の書き順の説明を聞き、配られた50音表で自分の名前を書いてみました。

クロマー（万能布）七変化

チョーン・クバン（伝統衣装）着付け

盛り上がったCYRの国際理解プログラム

説明をききながら、合掌を真似したり、文字を書いてみてみなさん、とても楽しかったようです。「カンボジア文字って難しいんですね。すごい」「楽しかった。カンボジアには行ったこともなかったけど、自分の名前を書いたことで親しみがわきました」などの感想をいただきました。

企業の社会貢献 全社員の14%、約3,000人が参加する社会貢献クラブ

㈱リコー、リコーテクノシステムズ㈱の全社員の14%に相当する2,912名が参加する社会貢献クラブ・Freewill。同社のCSR憲章には社会貢献を重んずる企業風土づくりが謳われています。

CYRの織物を積極的に社員の方に紹介してくださっていた運営委員会の方は、「今日が運営委員になって初めての講演会です。前回の講演会がきっかけとなり、自分もクラブの会員としてだけではなく企画にも参加したいと思って運営委員になりました。」とお話しくださいました。

この方のお話からも「社会貢献を重んずる企業風土」の広がりを感じました。CYRが今回参加させていただいた第10回講演会も、この風土づくりに貢献できたら幸いです。

大学の社会貢献

国際理解の教案を作って実演した東京外国語大学の学生グループ「るぱう」

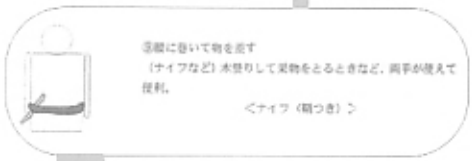
㈱リコーでの講演会で活躍した「るぱう」は、カンボジアを知る国際理解教育の教案づくりをしている東京外国語大学「東南アジア地域言語論ゼミ」の受講生グループです。「るぱう」はCYRにどのような活動紹介の依頼があるのか、対象や人数、内容の調査を行い、それに基づいて教案を開発しています。

社会に貢献したいという気持ちで学生たちが開発した教案は『NPO法人による国際理解教育の実践～カンボジアの事例から』という報告書にまとめられ、今後もCYRで最大限に活用し、効果的な国際理解プログラムを実施する予定です。

報告書にまとめられた教案

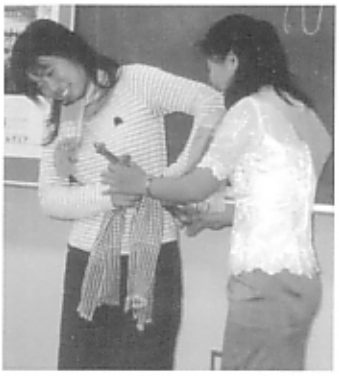
教案の中をのぞいてみよう

「るぱう」による教案：クロマー(万能布)の用途



教案に掲載されたクロマーの巻き方拡大図

大学や小学校でも実演



同大学の大学祭「外語祭」でクロマーの巻き方の実演をする「るぱう」の学生

連携のコツは十分な打ち合わせとフィードバック

「るぱう」初の実習となった㈱リコーの社会貢献クラブ講演会は、事前にCYR職員と学生が話し合う時間があまりとれなかったため、学生たちは自分たちの行っている紹介が求められていることと一致しているのか不安に感じていたそうです。この不安は後日の話し合いで解消できましたが、これからは事前に十分な打ち合わせができるようにするのが課題です。

社会人の国際協力への関心の高さに驚きました

㈱リコーでの実演後、「るぱう」の皆さんから感想をいただきました。

> 「あんなにたくさんの方が、関心を持っているのが新鮮でした。文字を書く体験も、とても熱心で積極的でした。
>
> イベントの最後に織物の販売を手伝ったときに社員の方に『カンボジアのことをもっと知りたくなりました』といわれたのが、うれしかったです。」

また「教案が出来上がったら、CYRが読んだ感想や実際に教案を使った活動紹介の経験を教えてほしい」との学生からの要望に積極的に応えていきます。

葬式にまつわるお話

カンボジア文化発見

カンボジア事務所スタッフ
トーン・サメット

カンボジアで教材制作を担当するスタッフ、トーン・サメットが父親の葬儀の経験に基づいてレポートします。

葬式は、いちばん悲しい儀式です。もう私たちは二度と会えないからです。故人が生きていたころ一緒に住んでいた子どもや甥・姪、孫などが葬式を行います。最初の日は、男性・女性を問わずたくさんの老人が手伝います。会場を整える人、お客に出す料理を作るためのかまどを掘る人もいます。他の人は、ノム・コーン、ノム・オンソームなどのお菓子を作りますが、これらはどんな葬式をするかによります。

火葬は夜に行われることが多いため、葬式は2日か3日かかります。最初の日、子どもや孫は喪に服して泣きます。年長の親戚や近所の人が、白い服、左肩から右側にかけて巻く布を子どもたち全員に準備します。親戚の他には、村の老人たち、アチャー（お寺の催事などを執り行う人）、5人の僧侶が参加します。彼らは、自分の心に応じた額のお金を包みます。親戚が死者を見送るのに多くのお金を使っているだろうと考えて、小さい椀一杯分のお米、ろうそく、線香を寄付する人もいます。

私の父の葬式の時は、アチャーを招いて、死者の床のそばに灯すろうそく、僧侶に死者の記念として贈る品物、葬式用の旗をくださるように頼みました。私の実家の村では、亡くなった人を家で火葬するのが、一般的です。父の場合も実家の前に火葬用の焼き場をつくり、大きな箱に炭をいれておかんのうえから灯油をかけ、火葬しました。その後お骨を拾い、残りの灰等は家の前を流れる川に流しました。もし家で葬式をやるなら、葬式が終わるまで子どもや孫は昼も夜も休めないくらい大変です。

プノンペンのお寺でお棺を火葬

特定非営利活動法人
CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会
東京事務局
〒106-0046 東京都港区元麻布3-2-20 丸統麻布ビル2F
TEL：03-3796-6377　FAX：03-3796-6399
Email：info@cyr.or.jp
URL：http://www5a.biglobe.ne.jp/~CYR/

子どもたちの明日 77号
◆発行日:2006年3月5日　◆発行人:深水正勝
◆翻訳ボランティア: 交野茂子、井手和子、落合デニース、市村英里、彌政芳恵、向井田由紀

CYRは「認定NPO法人」になりました。

CYRは、2006年2月22日付けで、国税庁から「認定NPO法人」に認定されました。
日本全国2万数千件の特定非営利活動法人の中から40番目の認定です。

皆様からのあたたかいご寄附は、税制上所得控除の対象となります（年会費は控除の対象となりませんので、ご了承ください）。控除の対象は、2006年3月1日以降に頂いたご寄附からとなります。

1. **個人によるご寄附の場合**
   特定寄附金とみなされ、所得控除の対象となります。

2. **法人によるご寄附の場合**
   一般の寄附金等の損金算入限度額とは別に、当該損金算入限度額の範囲内で損金算入することができます。

3. **相続財産をご寄附いただく場合**
   相続または遺贈により財産を取得した方が、その取得財産等を相続税の申告期限内にご寄附くださった場合、一部の場合を除き、その寄附金には相続税が課税されません。

寄附金控除に必要な「国税庁指定の領収書」は当会が発行いたします。寄附金控除等の制度に関するお問い合わせは、お近くの税務署にお尋ねください。
国税庁ホームページ　http://www.nta.go.jp/

CYRの活動をご支援ください

年会費
正会員 ¥10,000　学生会員 ¥3,000
団体会員 ¥30,000　賛助会員　規定なし

下記の口座にご送金ください。
郵便振替　（特活）幼い難民を考える会
No.00110-8-36227
銀行振替　特定非営利活動法人　幼い難民を考える会
三菱東京UFJ銀行六本木支店（普通）
No.1351747